



SL通信

NPO 法人
体育とスポーツの図書館
〒444-2424
愛知県豊田市足助町城山 49-2
TEL・FAX：0565-62-3500
HP：<http://sportslibrary.web.fc2.com/>
Blog：<http://sportslibrary.blog65.fc2.com/>

「私とスポーツ」

図書館を訪れた2名のサイクリストの声

「スポーツ図書館」と
雑誌「ニューサイクリング」に寄せて

交通教育NPO 「OSCN (尾張旭セーフティーサイクリストネットワーク) じてんしゃスクール」

代表 片山 昇

理事 寺尾正雄

梅雨も秒読み段階の今日この頃！

雨の休日は、メダルをこぐ足休めに、本の世界で自転車にふれる！？なんていうのもお酒落ではないでしょうか。

先日、OSCN関係者数名で、愛知県豊田市足助町にある「NPO法人 体育とスポーツの図書館」を自転車関連の文献を求め、訪れて参りました。このNPO法人は、学校教育現場の先生方や大学の教育研究の先生方により創設された、日本でも珍しい「体育とスポーツ・その教育」に的を絞り成書されている図書館です。訪れた際、きわめて貴重な、約50年前の発刊の、当時日本初にして唯一のサイクリング雑誌「ニューサイクリング」誌と出会う事ができました。

およそ、私と同じ年齢。極めていい状態に保存されていた雑誌に、一同驚きを隠せません。東北地方にお住まいの大学の先生からの寄贈だそうです。日本では、ここ最近のブームもあり、十数誌もの自転車関連雑誌が出版されております。

その中で、今も尚、この雑誌は今でも継続出版されております。私の小学生時代(30年前)には、一般向けサイクリング雑誌としては、創刊間もなかったサイクルスポーツ誌(八重洲出版)が代表的でした。当時すでに、「ニューサイクリング」誌は、ツーリング愛好家の専門誌という位置づけで、特に、山登りとサイクリングを合わせた様な「バスハンティング」といったジャンルのサイクリング記事が多く、極めて玄人風の雰囲気をもつ雑誌だったことを、今も鮮明に覚えております。

さて、そんな50年前のサイクリング文化をとどめた雑誌の内容についてOSCN理事の寺尾正雄さん流の視点での紹介文をお送り頂きましたので、皆さんにご紹介いたします。寺尾さんの記事を読み、現物の雑

誌を見てみたいと言う方は、ぜひ、足助にある「体育とスポーツの図書館」を訪れてみて下さい。

自転車・サッカー・野球・・・様々なスポーツに関する文献が揃っていますよ。(片山 昇)



雑誌「ニューサイクル」より

以下、OSCN理事でもあり、OSCNロゴマーク生みの親、デザイナー寺尾さんからの寄稿文です。

「まずは、超ベテランのサイクリストによるコラムが興味深いです。戦前の学生時代からすでにサイクリングや自転車競技をされていた方で、やはり戦争で自転車仲間が無くなりながら、しかし自らは生き残り、戦後の物資が無い状態（タイヤ等が不足）でもレースに参加し、亡くなった仲間の分も走る事が出来き、平和の喜びを感じた、という事です。他にもこういうベテランの方々の文章が載っており、我々の知らない時代の自転車文化の状況が面白かったです。こういう記事も今だからこそ貴重と言えるでしょう。

次に、当時(68年1月号なので、実質67年)のオランダ(アムステルダム)自転車事情のレポート記事も面白かった。確かに自転車天国。平たい土地のお国柄か、かなりの割合の人達が普段の交通に自転車を使っていた模様。もちろん列車に乗せられるので、ちょっと距離があっても自転車が便利。自動車は道路の隅っこを申し訳無さそうに走っている(?)感じだったそうです。ただ自転車そのものは実用的な車種ばかりで、スポーツ車はごくわずかだったようです。

それだからか、オランダの自転車産業は保守的で遅れているとの事。技術的にもイタリア・フランスの物と比べるとかなり差があった様です。同じヨーロッパでも随分違いますね。なお、ミニスカートの女性達が普通に自転車に乗っているのが、著者の嬉しい驚きと

書かれていました(笑)

続いて、雑誌の中で気になった広告等の写真についての紹をします(添付写真)

1、変わった名前のスポーツ車。なぜ「アブ」なのでしょう(笑) それと巨大なヘッドライトとライトカバーが特徴。ネタはラリーカー?とところで、光風自転車の「ケンコー」ブランドですが、70年代の頃は確かゼンケンコー自転車でした。合併等があったのかもしれないですね。

2、ダイヤコンベおなじみ吉貝のステムの広告。キャッチコピーが可笑しい(笑)「宣伝」なら金さえ出せば出来そうですが、「使用されている」に説得力がある(?)。この頃は「ダイヤ」は無く、ただの「コンベ」だったのか。

3、例の、オランダはアムステルダムのミニスカートで自転車に乗る女性。写真を見るとそれ程のミニではないものの、気になります。造り難そう。交差点を斜めに横断しているのでしょうか。車は停止している模様。当時にしてセバレート式信号なのか。

4、時には知っていた三光舎の変速機プロキオン。この頃はあったんだ。スプリングが外に出ているのがごついかもしれないが、メカニカルな雰囲気は好き。スプリングの交換も簡単そう(めったにやらないだろうけど)。

5、吉貝のカンチレバーブレーキかと思いきや、吉川でした!もしかして、後に吉貝に合併吸収???

6、7、可変式ハンドル。普段はドロップかセミドロップ。校則による規制がある通学時にはアップハンドルにする事が出来、駐輪時には折り畳める。丸石の物は子供の頃の記憶にありましたが、山本製作所というパーツメーカーの物は知りませんでした。丸石の物のほうがカッコイイかな。

以上、約50年前のニューサイクリング誌に関するレポートでした。」(寺尾正徳)

寺尾さんの記事を読み、3年前にオランダを訪問した私は、現地で見た状況と、50年前の雑誌が基になった今回の記事とを比較し、大変驚きました。

それは、「オランダの現在の自転車の状況が、50年前には既に文化として定着し、現在までほぼ変わらず続いてきた文化・伝統のようなものであった」ということ。オランダ人は、堅実気質・節約志向が精神文化の中に脈々と根付いておりお金のかかること・すぐに新しいものに飛びつかない気質と、オランダ人から教えてもらいましたが、これほどまでに、自転車の世界(使い方や使用している自転車のスタイル等)が、50年間という年月、ほぼ変わらずにいたとは・・・多様な情報やスタイルが瞬時に飛び交う現代社会の中で、隣国ベルギーの自転車文化の様子と比べても、全く異なるスタイルの自転車の使い方の文化が存在しているオランダ。地続きで・・・まともな国境すら無いのに・・・お互いに影響しあう等して、大きくスタイルを変える事が無い・・・ヨーロッパにある国々の持つ精神性のようなものに驚きでした。日本にも、素敵な自転車文化・のりもの文化が、これからしっかりと根付いて欲しいと、心から思いました。(片山 昇)

<執筆者紹介>

片山 昇氏

- ・交通教育NPO「OSCNじてんしゃスクール」代表
- ・愛知県自転車安全教育指導員(愛知県交通安全協会)
- ・元オートバイオフロードレースプロレーサー

寺尾正徳氏(デザイナー名:まかQ)

- ・OSCN理事・サイクリスト経験40年
- ・「商業デザイナー」
- ・2004ニューバイシクルコンペティション(財)日本自転車普及協会会長賞「タチコギ」での受賞



雑誌「ニューサイクル」より